

顔面付釣手形土器



顔面釣手形土器（左：正面、右上：側面、右下：背面）

顔面付釣手形土器は富県小学校の東側、御殿場遺跡の^{たてあな}竪穴住居から、ほぼ完全な状態で出土しました。縄文時代中期中葉（今から約4700年前）、曾利I式期のものです。大きさは、高さ39.5cm、幅25cmで、煮炊きする土器よりも分厚く作られています。土器の両側には5本の指のようなものが表現されており、大きな手が土器を抱えるようです。背面はひも状の粘土を付けた立体的な模様になっています。小さく蛇行している部分は、女性の髪の毛を表現していると考えられています。

顔の付いた土器

顔の付いた土器は、長野県中南部から関東西南部までを中心とした狭い範囲で、縄文時代中期の一時期に、流行しました。この時期には、土器に神の像や世界観が、特に派手な装飾で表現されました。顔面付釣手形土器もその一つです。御殿場遺跡出土の顔面付釣手形土器と、非常によく似た土器が諏訪郡富士見町の曾利遺跡から出土しています。

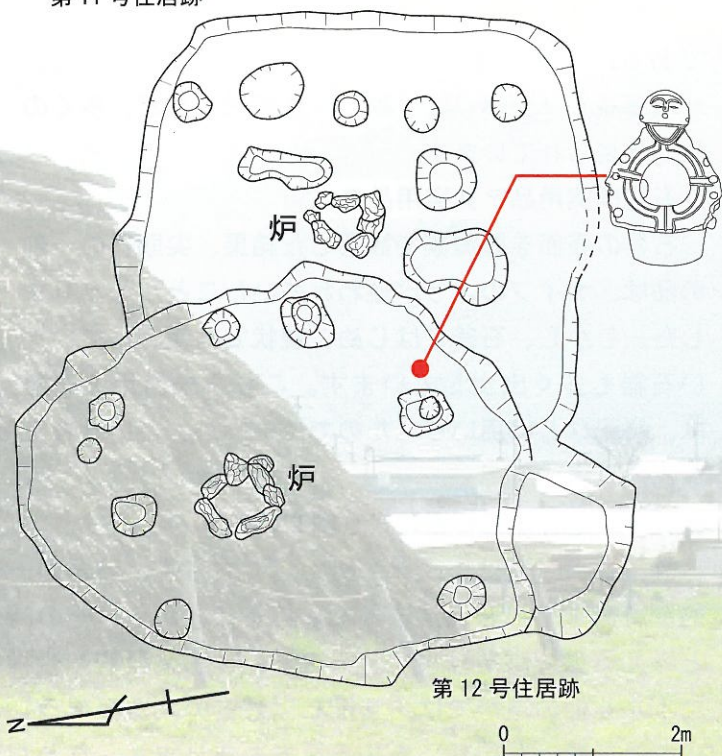
釣手土器は何に使われたの？

釣手土器とは、ひもを通してつるす部分（釣手）が付けられた鉢形の土器のことを言います。1つの集落遺跡の中から、まれにしか出土しない土器で、祭祀などで大切に使用されていたと考えられます。他の遺跡から出土した釣手土器には、内側に加熱の痕跡やススが付着した例があり、灯火具（ランプ）として祭祀の場などで、大切に使用されていたと考えられます。しかし、この顔面付釣手形土器には、そのような火を使った痕跡がありません。どのように使われていたのか、まだ謎の多い土器です。

御殿場遺跡について

昭和41（1966）年、この地の開田事業に先立ち緊急発掘調査が行われました。縄文時代中期中葉の住居跡5基、縄文時代中期後葉の住居跡11基、平安時代の住居跡3基、時代のわからない住居跡4基が検出されました。現在は長野県史跡に指定され、縄文時代の竪穴住居を復原、展示しています。

第11号住居跡



顔面付釣手形土器出土位置図